

発掘された「いにしえの工場」

…生産遺跡は何を物語るのが…



豊かな資源に恵まれた島根県では、古代より「鉄」「土」といった、さまざまな特産品がありました。この中には鉄のようた、一時期は全国の生産量の大半を占めるものさえあったのです（詳しくは一巻を参照）。

「いつした生産の場で活躍した、いにしえの匠たちの遺産は、県下のあちこちに残されていますが、今までの実態は秘密のベールに隠されてきましたが、しかし、近年行われた発掘調査によって、匠たちの姿を鮮明にする新事実や、彼らが生きた当時の社会の様子が次々と明らかになってきました。

「この章では、とくに「たたら」「五作土房」「窯跡」を取り上げ、匠たちの残した足跡をたどってみたいと思います。

豊かな資源に恵まれた島根県では、古代より「鉄」「土」といった、さまざまな特産品がありました。この中には鉄のようた、一時期は全国の生産量の大半を占めるものさえあったのです（詳しくは一巻を参照）。

「いつした生産の場で活躍した、いにしえの匠たちの遺産は、県下のあちこちに残されていますが、今までの実態は秘密のベールに隠されてきましたが、しかし、近年行われた発掘調査によって、匠たちの姿を鮮明にする新事実や、彼らが生きた当時の社会の様子が次々と明らかになってきました。

「この章では、とくに「たたら」「五作土房」「窯跡」を取り上げ、匠たちの残した足跡をたどってみたいと思います。



江戸時代の高殿たたらの模型（島根県埋蔵文化財調査センター蔵）
「高殿たたら」は江戸時代に成立したもので、それまでの「野だたら」と違い建物の中に炉を築いている。高殿たたらは防湿用の大がかりな地下構造を持つなど、野だたらから飛躍的に進歩している。発掘調査では、たたら職人で知られていた地下の「心臓部」の全貌を明らかにする。

「たたら」を掘る

…炉の下に眠るたたら職人の「秘伝」…

たたらは鉄を作るたびに炉を壊し、鉄を取り出します。そのため、遺跡に炉が残っていることはほとんどありません。しかしその地下には、思いもよらない施設が眠っているのです。

深さ三メートル以上にも達する、プール状の巨大な穴の中の複雑な構造。これが山陰の江戸時代のたたら特有の施設、「床釣り」です。発掘調査をするとまず現れるのが、かちかちに焼けた、小舟と呼ばれる二本のトンネル状の施設です。わずかに残っている文献によれば、この中にたきぎを入れ、数二〇日にわたって燃やし続け、徹底的に湿気を取り除いていたとされています。

さらに掘り進むと、粘土や砂利などが幾重にも硬く敷

き詰められています。これも地下からしみ出る湿気を防ぐためのものです。ようやく底まで達すると、今度は石を並べた排水溝があります。

鉄を作るためには極めて高い温度が必要です。しかし地中に湿気があると炉の中の温度が上がりません。この構造は、湿気を極限まで取り除くために開発された、職人の血と汗の結晶と言えるでしょう。

この職人の心血がそがれた「床釣り」は炉と違い、一度作ると半永久的に作り替える必要がないため、当時の職人でもめつたに見ることができません。職人たちは「床釣り」の作り方を家の秘伝とし、口伝でこの技術を伝えていたと言われていました。

近年の発掘調査は、当時の職人でさえ滅多に見られなかった、たたらの秘伝の全貌を圧倒的なスケールでわわわの目の前に再現してくれました。

発掘しほれた話

…鉄滓…

たたらは、今で言う工場のようなものです。できた製品はすべて出荷され、遺跡に残された「モノ」は、産業廃棄物とも言うべき鉄滓（鉄を作る時に出るカス）ばかりです。その量は、江戸時代の高殿たたらになるとトラック数台分にもなるため、たたら発掘は、鉄滓との格闘であるといっても過言ではありません。

ひと昔前まで、この鉄滓はどちらかと言えはやつかいもの扱いされていました。しかし近年の理化学技術の進歩により、この鉄滓からどんな種類の鉄を作っていたのか（たとえは刃物に使う鋼を作っていたのか、鋳物に使うような硬い鉄を作っていたのか）までわかるようになってきました。言わば、排泄物から何を食べていたのかがわかるようなものです。

その結果、今まで相手にされなかった「カス」は、現在たたら謎を解明する手がかりとして、一躍脚光を浴びるようになったのです。

たたらの変遷

複雑かつ高度な近世たたら「床釣り」の構造は、一朝一夕にはできあがったものではありません。近年の発掘調査は、簡単な地下構造から複雑な「床釣り」へと変化する古代からのたたら職人の苦闘の歩みを私たちに教えてくれます。さらに「床釣り」の出雲と石見の技術の違いなど、たたら職人の「秘伝」をも、近年の調査は解明しつつあるのです（詳しくは1巻を参照）。

<p>今佐屋山遺跡（瑞穂町市木） 古墳時代後期ごろ（6世紀末～7世紀初め）の、全国でも最古級の製鉄遺跡。まだ地下構造がない「箱形炉」と呼ばれる炉で鉄を作っていた。現在は、浜田道瑞穂インターの地下に保存され、説明板が立っている。</p>	<p>板屋川遺跡（頼原町志津見） 「竪炉」と呼ばれる、東日本の技術を組み製鉄炉。平安時代に東北地方から連れて来られた人びとが、ここで鉄を作ったという説もある。志津見ダム建設工事に伴い調査。</p>
<p>タタラ山第1遺跡（瑞穂町市木） 炉の下に防湿用の炉壁を並べた地下構造が見つかった。中世の製鉄炉。燃料を作った炭窯も見つかった。県道市木井原線の脇に説明板がある。</p>	<p>かど門遺跡（頼原町志津見） 志津見ダム建設で見つかった、中世の製鉄炉。炉の下に木炭を敷いた防湿施設がある。</p>
<p>くたに久谷たたら跡（大田市三瓶町） 三瓶山ふもとの山あいで見つかった、江戸時代の高殿たたら跡。石見地方で高殿たたら跡が発掘されるのは珍しい。</p>	<p>だんばら檀原遺跡（佐田町上橋波） 「高殿たたら」を含む、江戸時代の山内（たたらを中心とした村）跡。志津見ダム建設工事に伴い調査。</p>

厚く推積した鉄滓（上）と炉から流れ出した状態の鉄滓（左）
（上：今佐屋山遺跡、左：中ノ原遺跡・瑞穂町市木）
左の中ノ原遺跡では、鉄滓などの分析から硬い鉄（銑鉄）を中心としていたことがわかった。